

竹内好訳

魯迅文集

第六卷

筑摩書房

魯迅文集第六卷

一九七八年二月二十八日初版第一刷発行

訳者 竹内 好

発行者 岡山 猛

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二―八郵便番号一〇一―九一
電話〇三―二九一―七六五一振替口座東京六一四一二三

印刷・精興社 製本・牧製本

1397-7806 4604

魯迅文集第六卷

目次

評論 一九三四年七月—一九三六年十月

韋素園君を憶う

子どもの写真のことから

門外文談

「肉の味を知らず」と「水の味を知らず」と

「面子」について

運命

「戯」編集部への返信

「戯」編集部へ

中国文壇の亡霊

病後雑談

病後雑談の余

『集外集』序言

111 93 75 65 63 56 53 48 45 16 11 3

阿 金

俗人は風雅の士を避けるべし

『生ける支那の姿』序

諷刺について

「文人は軽蔑し合う」

「文人は軽蔑し合う」 134

再論

137

三論

140

四論

145

五論

148

明術

148

六論

153

二壳

153

七論——両傷

156

現代支那に於ける孔子様

「諷刺」とは何か

世間の噂はこわい

『支那小説史』序

「題未定」草

一 178

二 181

三 185

五

190

六

197

ドストエーフスキイのこと	221
私は人をだましたい	224
私の最初の先生	229
深夜に記す	239
「関所を出てゆく話」の「関所」	255
徐懋庸に答え、あわせて抗日統一戦線の問題について	262
「これも生活……」	281
死	287
女 吊	295
半夏小集	304
後日の証拠に(三)	310
太炎先生のこと二つ三つ	317
太炎先生にふれて思い出すこと二つ三つ	322

第六卷訳註についてのおことわり

訳註

資料「魯迅の論争態度」

竹内好

評
論

一九三四年七月—一九三六年十月

韋素園君を憶う

私にも記憶がないわけではないが、ただ、きわめて断片的なものなのだ。私の記憶は、ちょうど庖丁でそがれた魚の鱗のようなものだという気が自分ではする。まだからだにくっ付いて残っているものもあるし、もう水中に落ちてしまったものもある。水をかき廻せば、いく片かは浮きあがってきて、きらめくかもしれない。けれども、それには血痕が付着しているので、なまじ鑑賞家の眼を汚しては、という気が自分ではする。

いま、友人たちが韋素園君^{ウェイスイユアン}を記念したいという。私もなにか発言せねばなるまい。たしかに、それは私の義務である。してみれば、たとい何が浮かんでくるかわからぬにせよ、身外の水までも一度はかき廻してみるほかあるまい。

たしか十数年前、私が北京大学の講師をつとめていたころのことである。ある日、教員控室で、髪もひげもボサボサの青年に会った。その青年が李霽野^{リィイェー}だった。たぶん私が素園を知ったのは、この霽野の紹介によったと思うが、そのときの模様は忘れてしまった。いま記憶に残っているの

は、かれが旅館の小部屋ですでに出版計画に着手したころのことである。

その小部屋が未名社^{ウェイメンシャ}だった。

そのころ私は、小さな叢書を二つ編集していた。一つは「烏合叢書」これはもっぱら創作を収める。もう一つが「未名叢刊」で、こちらは翻訳だけ。どちらも出版元は北新書局だった。出版社にせよ読者にせよ、翻訳を喜ばぬのは当時も今と変りがなく、そのため「未名叢刊」はさっぱり人氣がなかった。ところが素園たちの望みは、まさに外国文学を中国へ紹介することにあった。そこで李^リ小^シ峰^フに、「未名叢刊」を同人数人の自主刊行にしたいので譲ってはもらえまいかとかけ合ったところ、小峰は二つ返事で応諾、かくてこの叢書は北新書局の手を離れた。なにしろ原稿はわれわれ自身の手持ち分がある。あと印刷費さえ工面すれば、すぐ仕事にかかれる。社名は叢書の名をとって「未名」とした——もともと「名なし」の意味ではなく「まだ名がない」意味である。ちょうど子どもが「未成年」であるように。

たしかに未名社の同人たちには、野心めいたものは何もなかった。ただ地道に、コツコツ仕事をやってゆきたいという気持ちだが、全員に共通してあるだけだった。そしてその中心が素園だった。

こうしてかれは、見すばらしい小部屋、すなわち未名社で事務をとることになった。もともと、

かれが病氣中で、学校へ行けなかったために、たまたま寨とりでの番人の役がかれにふり当てられた、という事情も多少はあったかもしれない。

このボロ寨で素園に会った、というのが私の最初の記憶である。小柄な、やせた、機敏な、まじめそうな青年だった。窓ぎわにボロボロになった外国の書物が何列もならべてあって、貧乏にめげずかれが文学に打ち込んでいる様を証あかしかしていた。だが、それと同時に私は、よくない印象も受けた。どうもこの男とはつき合いくいのではないか、と思った。にが虫を噛みつぶしたような顔だったから。もっとも、この「にが虫を噛みつぶした」というのは、押しなべて未名社同人の一種の特徴なのだが、ただ素園の場合は、それがきわ立っていて、すぐ相手に感づかれてしまうのだ。のちに、私は自分の判断がまちがっていたこと、かれはつき合いくい人間ではないことがわかった。かれが笑顔を見せたがらないのは、たぶん年齢の開きが大きすぎることに、私に對して改まった態度をとるのが原因ではなかったかと思う。もし私が、かりに青年にもどって、彼我の境をとり払ってみせれば、それが証明されるだろうが、できない相談だ。たぶんこの事情は、霽野たちにはわかっているだろう。

私はのちに自分の誤解に気がついたわけだが、それと同時に、かれの致命的欠陥にも気がついた。まじめすぎるのだ。表面は沈着なようできて、じつはかれは激情の持ち主だった。まじめであることが人間の致命的欠陥でありうるか。少くとも、その当時から今日までのところ、まさに然り。まじめな人間は激情に駆られやすい。それを外に発すれば自分の生命を失うことになるし、

内にこもらせれば自分の心を噛みくだくことになる。

ここに小さな例がある——われわれには小さな例しかない。

そのころ、私は段祺瑞首相とその手下どもの圧迫によって、すでに厦門に逃げ去っていたが、北京ではまだ乱暴狼藉がつづいていた。段の一味である女子師範大学校長林素園は、軍の力を借りて学校を接收し、一大チャンバラを演じたあげく、踏みとどまっていた数名の教員に「共産党」のレッテルを貼った。このレッテルは、ある種の人々にはこれまで「執務」上の方だったし、しかもこのやり方は常套であってちっとも珍しいことではない。それなのに素園は、激情に駆られたらしく、以来、私によこす手紙ではかなり長い期間、「素園」の二字を憎んで使わず、代りに「漱園」という名を使っていた。また、おなじころ未名社の内部にも衝突がおこった。高长虹が上海から私に手紙をよこして、素園が向培良の原稿を握りつぶしたから何とかしてくれ、というのだ。私は返事も出さなかった。すると高は、『狂飜』誌上で悪態をつきはじめた。まず素園に対して、それから私に対して。北京にいる素園が培良の原稿を握りつぶしたからといって、上海にいる高长虹が腹を立てて、厦門にいる私に何とかしろと迫る、こんな滑稽なことがあるものか、と私は思った。しかも、一つの集団が、たとい小さな文学集団であろうとも、状況が困難になるときまって内部から悶着をおこす人間が出るのは、これまた珍しいことではない。ところが素園は、まじめ一方なのだ。私に手紙でくわしい事情を伝えてきたばかりでなく、雑誌にも弁

明の文をのせた。いったい「天才」たちの法廷でほかのものの弁明が成り立つものだろうか——私は長嘆息のほかなかった。一介の文人の身で、しかも病氣をかかえながら、こんなに真剣に内憂外患に立ち向ったんでは、先が思いやられる。むろん、内憂外患といってもこれは小さな憂患だ。しかし、まじめで激情の持ち主である個人にとっては、かなりなものである。

間もなく、未名社は解散を命ぜられ、何人かは逮捕された。ただ素園は、喀血で入院中だったせいか、逮捕を免れた。しかし、その後、逮捕者は釈放され、未名社も再開された。なぜ解散から再開へ、逮捕から釈放へ、こんな唐突な動きがあったのか、そのカラクリは今もって私にはわからない。

私は次の年——一九二七年の秋のはじめに広州へ移ったが、ここでも引きつづいて何通もかれから手紙をもらった。西山のサナトリウムで、医者から起床を禁じられているので枕に伏して書いたものである。表現はいっそう明晰になり、思想もいっそう精密、かつ大局的になっていた。それがかれの病氣についての私の懸念をいっそう募らせることにもなった。ある日、突如としてかれから一冊の本がとどいた。布表紙の上装本の素園訳『外套』⁽⁵⁾だった。それがわかると、私は思わず身ぶるいした。あきらかに形見の品ではないか。もう先が長くないことをかれは自覚したにちがいない。

その本を手にとったものの、開いてみる気にはなれなかった。しかし、ほかに何ができよう。

そのときふと思い出したことがあった。素園の親友で、これも咯血したことのある男が、ある日、素園の眼の前で咯血した。びっくり仰天した素園は、その男に、愛と憂いのこもった声で《もう咯^はくな！》と命令したそうだ。この話をきいたとき私はイプセンの『ブランド』を思い出した。ブランドは息絶えた相手に向って、立ちあがれと命令したが、そんな神通力のあるはずもないブランドは、ついに自分を雪崩^{なだれ}の下に埋めるほかなかった……

宙天にブランドと素園のまぼろしが見えたが、声は出なかった。

一九二九年の五月の末、この上ない幸運にめぐまれて私は西山のサナトリウムに素園を見舞い、談話をかわすことができた。かれは日光浴でまっ黒に日焼けしており、元気は少しも衰えていなかった。われわれのほかに数人の友人がいて、みんな愉快そうだった。だが私は、愉快の反面、しばしば悲哀感につきまとわれ、思いが千々に乱れた。ふと、かれの愛人がかれの同意のもとに他の男と婚約をすませたことを思い出したり、この分では外国文学を中国に紹介したいというかれのささやかな願いさえ果されそうにないな、と思ってみたり、いったいかれは、ここで療養生活を送りながら、全快の日を待っているのだろうか、それとも滅亡の日を待っているのだろうか、と疑ってみたり、あの上装本の『外套』を送ってくれたのは、どういふつもりなんだろうか……

しかも壁には、ドストエフスキイの大きな肖像画がかかっている。この作家を私は、きわめて

尊敬はしているが、一面、その冷静なまでに残酷な文章を憎んでもいる。かれは精神的な苦刑を設けて、そこに不幸な人間を次から次へと連れ出し、苦しむ様をわれわれに見せつけるのだ。いま、かれは沈鬱な眼で素園とそのベッドとを見つめている。あたかも私にこう告げるかのように——ここにも一人、作品に登場させてよい不幸な人間がいるな。

むろん、これは小さな不幸だ。だが、素園その人にとっては、かなりなものである。

一九三二年八月一日の朝五時半、ついに素園は北平同仁医院⁽⁶⁾で病死し、すべての計画とすべての希望はともに滅びた。私にとって残念でならぬのは、危難を避けるためにかれの手紙を焼いてしまったことだ。⁽⁷⁾『外套』一冊を唯一の記念品として、わが身边に永遠にとどめるほかない。

素園の病死からたちまち二年が過ぎた。この間、文壇でかれについて発言したものは一人もいなかった。これも珍しいことではない。かれは天才でもないし、豪傑でもないのだ。生前に黙々として生きていたように、死後はむろん黙々として消えるまでだ。だが、われわれにとっては、かれは記念に値する青年である。なぜなら、かれは黙々として未名社を支えていたから。

いま未名社はほとんど消えかけている。その生命もあまり長くはなかった。しかし、素園が経営に当たっている間に、ゴゴリ、ドストエフスキ、アンドレエフを紹介し、ファン・エーデンを紹介し、エレンブルグの『パイプ』とラフレーネフの『四十一人目』を紹介した。⁽⁸⁾ほかに「未